

# 知的障害者が相模原障害者施設殺傷事件について語ることの意義

## —「にじいろでGO!」における当事者活動の取り組みから—

もちづき たかゆき  
望月隆之

### 〈要 旨〉

2016年7月26日未明、「津久井やまゆり園」にて元施設職員による殺傷事件が起きた。被害者は施設の利用者と職員であり、19名の利用者が亡くなり、26名が重軽傷を負うという大事件となった。事件後、報道機関により大きく報道され、専門家によるコメントや検証がなされた。しかし、事件の当事者である知的障害者の声は、ほとんど報道されていないという状況が続いた。「にじいろでGO!」は、横浜市在住の知的障害者の女性が、神奈川県内在住の知的障害者及び家族、支援者に呼びかけ、知的障害者のこれまでの人生や相模原障害者施設殺傷事件について、当事者が語る声を社会に伝えるために作られた当事者団体である。これまでの活動は、知的障害者の声として多くのメディアを通じて社会に発信されている。

本報告では、「にじいろでGO!」の立ち上げの経緯及び事件後1年までの活動について報告し、知的障害者が自ら事件について語ることの意義及び今後の課題と活動の展望まで述べる。

### 〈キーワード〉

知的障害者、相模原障害者施設殺傷事件、当事者活動、セルフアドボカシー

## I. はじめに

2016年7月26日未明、神奈川県相模原市にある障害者支援施設「津久井やまゆり園」にて、元施設職員による殺傷事件が起きた。この事件は、障害者福祉に関わる全ての人に大きな悲しみと怒りを与えるものであった。被害者である利用者19名は亡くなり、26名が重軽傷を負うという大事件となった。単逮捕された容疑者は、施設の前職員であることから、多くの関係者に衝撃をあたえた。

事件後、多くの報道機関によって事件は連日報道された。事件の背景などが報道されるにつれ、専門家などによるコメントはなされていたが、事件の被害者である知的障害者の意見や声は、ほとんど社会に発信されていないという状況が続いた。今回の事件を受け、社会全体で知的障害者の声をしっかりと受け止め、誰もが暮らしやすい社会を創造していくために、新たな一歩を踏み出さなければならないのではないだろうか。

本報告は、筆者自身が本活動の事務局を担当していることから、相模原障害者施設殺傷事件について語ることを中心にワークショップを行ってきた「にじいろでGO!」の立ち上げの経緯について報告する。また、2016年11月13日のワークショップの取り組みを中心に、事件後1年を通じた活動報告を行い、知的障害者が事件について語ることの意義について述べる。その上で、今後の課題と展望について提示することを目的とする。

## Ⅱ. 研究の視点および方法

本報告では、筆者自身が事務局を担当している当事者団体「にじいろでGO!」の立ち上げから、事件後1年(2017年7月)までの活動内容について、新聞、雑誌、報告書を中心に報告を行う。その上で、今後の課題及び活動の展望について述べる。

## Ⅲ. 倫理的配慮

「日本社会福祉学会研究倫理指針」に沿って、知的誠実及び倫理を遵守する。本報告に際し、個人が特定されることがないよう個人情報の保護に努め、匿名性を担保した。また、本報告の掲載に関しては「にじいろでGO!」事務局を通じて、同意を得た。

## Ⅳ. 結果および考察

### 1. 「にじいろでGO!」立ち上げの経緯

「にじいろでGO!」が立ち上がるきっかけとなったのは、2016年9月28日に日本障害者協議会(JD)主催の「相模原事件を考える緊急ディスカッション」が参議院議員会館で開催されたことまで遡る。シンポジウムの発言者として、知的障害のある2名の女性が登壇した。その中で、横浜市在住のAさんは事件を受けて、「自分とは何だろうか。本当に生きていてよいのだろうか」と会場にいる人たちへ投げかけた。そして、「生まれ変わったら知的障害者でよいと思える人はいますか?」

知的障害者が相模原障害者施設殺傷事件について語ることの意義—「にじいろでGO!」における当事者活動の取り組みから—

と質問した。多くの人が手を挙げない中、「私は今の自分が好き。だから生まれ変わっても知的障害のままでいい」と発言した。そして、事件によって19名の知的障害者が亡くなったこと、生きることをテーマに障害がある仲間との座談会を開く計画があることを述べたのである。

Aさんの想いと計画について、筆者を含めた4名の支援者が10月に集い、具体的な実施内容について話し合いが行われた。その中で確認された課題は、以下のとおりである。

- ①マスコミによる連日の報道を振り返ると、事件に対する知的障害者の声がほとんど報道されていない。
- ②これまで当事者活動などで意見を述べた経験が少ない知的障害者に声をかける。
- ③事件の被害者が匿名での報道となったため、実名で話す会とする。
- ④難しいテーマで話し合うことになるため、簡単に意思表示や感情を表現できる工夫が必要。
- ⑤容疑者が「障害者はいなくなればいい」と発言したことについて取り上げ、これまでの生活の中で、傷ついたことなどの体験を話し、みんなで共有する。
- ⑥これまで生きてきて良かったこと、こうしたいという夢や目標を話し合う。

以上を踏まえ、2016年11月13日に神奈川県社会福祉会館にて、「知的障がいのある自分たちの経験を話し合おう—相模原障害者施設のこと—」を計画した。Aさんは、「皆さんへ 自分のこと、いろんな経験のこと、辛いこと、うれしいことを経験したこと、相模原で障がいの者の施設で起きた事件のことなどを神奈川県内の同じ障がいのある人たちと話し合いたいです。ぜひお話を聞かせてください」と呼びかけを行い、ワークショップ開催の趣旨について、次のように述べている。

今年7月26日に相模原の障害者施設でとても悲しい事件がありました。私は自分の仲間19人が亡くなったことが大きなショックで涙が止まらなかったです。容疑者が手紙に書いていた「障がいの者は生きていてもしかたがない」という言葉をテレビで見て、心が壊れました。私はいろいろなことを考えました。私は自分が本当に障がいを持って生まれて来て良かったことが、何だかわからなくなりました。楽しいことや辛いことがこれからもあると思うけど、これも生きる意味だと思いました。

私はこれからも障がいを持った一人としていろんな人と出会いや経験をしていきたいです。同じ障がいの仲間とこれまでのこと、相模原の事件のこと、そしてこれからの夢や目標のことを話し合しましょう。（「知的障がいのある自分たちの経験を話し合おう—相模原障害者施設のこと—」配布資料）

Aさんの呼びかけに賛同した横浜市、茅ヶ崎市、三浦市、藤沢市在住の知的障害者9名が参加し、10名の知的障害者によるワークショップが開催されることになった。

## 2. 知的障害への配慮と事件を話し合うための工夫

Aさんは、知的障害への配慮が必要であると考え、支援者とともに知的障害への具体的な配慮と円滑な話し合いを行うための工夫について検討した。事務局で話し合った内容を踏まえ、具体的な配慮の内容について紹介したい。

### ①ワークショップ形式

話し合いの形式として、「ワークショップ形式」を採用した。これは、Aさんのこれまでの当事者活動の経験から、講義形式では知的障害者の本音は引き出せず、参加者全員の顔を見ながら、ワークを行う形式が良いと考えたためである。ワークでは、文字を書く、絵を描くなどの作業を行うことができる。意見を述べる際は、言葉での表現だけではなく、文字や絵での意思表示が可能になるというメリットがある。

### ②「○」「×」カード

ワークショップでは、「○」と「×」が描かれている札を用意した。これは、100円ショップなどで安価に入手することができる。「○と思うか、×と思うか」または「よい、悪い」の質問に対し、どちらかを選んで一斉に札で意思表示することが可能である。また、「話してもよい、話したくない」という意思を「○」「×」で表示できるというメリットがある。

### ③顔マークシートの活用

ワークショップでは、知的障害者が相模原障害者施設殺傷事件に対しての感情を自由に表現してもらうことを目的に、「顔マークシート」を活用した。この顔マークシートは、社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会（現、全国手をつなぐ育成会連合会）が作成した「自分の障害を知る・可能性を見る みんなで知る見るプログラム」の冊子に付属しているCD-ROMにデータが収められている。24種類の顔マークシートの中から、あらかじめ事務局で6種類を選択し、拡大コピーした用紙を参加者に配布した（図1）。

〈図1 顔マークシート〉



### 3. ワークショップで話し合われた内容

2016年11月13日、神奈川県社会福祉会館に知的障害者10名と支援者及び事務局、報道機関などあわせ約20名が参加した。初対面の方もいること、最初から事件のことを話すことを避けるため、最初にこれまでの人生で楽しかったこと、これまでの人生で辛かったことを話し合った。これまでの人生経験についてのワークに関して、毎日新聞では、次のようにまとめられている。

「人生で楽しかったこと」について、交際中の男女が「彼女ができたこと」「彼女になったこと」と、それぞれはにかみながら回答する。一方で「嫌だったこと」については「手が不自由なのをばかにされたり、蹴られたりした」など、学校や職場でのいじめ体験の訴えが続いた。（『毎日新聞』2016.11.16朝刊）

休憩後、Aさんは「相模原の事件で19名の仲間が亡くなりました。意見や絵で書いてください」と問いかけた。参加者は配布された顔マークシートを選びながら、それぞれの思いを書き綴っている(表1)。

〈表1 ワークショップの主な発言内容〉

参加者が選んだ 顔マークシート	参加者がワークシートに書いた内容
 おこった	・相模原の事件で19名の方が亡くなったのはショックだった。 ・なんで、障害者の方がころされなければいけないんだ！ ・絶対ゆるせない問題だ！ ・二度とこんな事件はおこってほしくありません ・障害の仲間がいるから、障害の仲間をバカにしないで ・同じ人間としてあつかってほしいです
 もうやだ	・二度と事件をおこなさい。 ・障害者をバカにしない。
 なき	・自分のことをバカにされました。 ・おかしいよね。

ワークショップを通じて、知的障害のある当事者は事件に対する“怒り”や“悲しみ”の感情を明らかにした。また、これまでの人生の中で、いじめや差別を受けたことがある参加者もいたことから、他人事ではなく仲間が殺された事件であるという認識があることがわかった。その他に、顔マークシートを選ばず、自ら「激おこ」のイラストを描き、「ゆるせない。」と表現した参加者もいた。顔マークシートの活用によって、知的障害者の感情を引き出すことができ、相模原障害者施設殺傷事件に対する思いや本音を聞くことができたのではないかと思われる。

#### 4. ワークショップの取り組みを社会への発信

このワークショップの取り組みは、テレビや新聞などで報道された。朝日新聞は翌日11月14日に「障害ある私たち 声発信」と題した記事を作成しているので、一部紹介する。(人名のみ一部改変)

「事件で19人が亡くなったことを、みなさんはどう思いますか？」Aさんの問いかけに、参加者は怒った顔や泣き顔など6種類のイラストから今の気持ちに合うものを選んでワークシートに貼り、思いを書き込んで発表した。(略)Aさん以外の参加者は初めて公の場で事件について語った。これまで話題にするのもつらく、どう表現していいのかもわからなかったという。イラストはAさんのアイデアで、話したくない人のために「×」印の札も用意した。終了後、参加者たちは「ようやく事件のことが話せた」とホッとした様子だった。(『朝日新聞』2016.11.14 夕刊)

また、神奈川新聞はこのワークショップの取り組みについて、2016年12月8日と9日の2回に分け、「時代の正体 障害者殺傷事件考 実名で語る障害者」を特集した。この記事では、参加者一人ひとりの顔写真と実名が掲載され、ワークショップにおける発言を丁寧に記述している。記事の冒頭では、次のような記述がある。

入所者19人の命が奪われた相模原市緑区の「津久井やまゆり園」殺傷事件を巡り、障害者が公の場で自らの思いを語ろうと声を上げている。「知的障害者が何を考えているのかを知ってもらい、お互いを大切にし合える社会につなげたい」。一人一人の心の中に、障害者への偏見や無関心がないか―。事件への怒りや悲しみを訴え、社会に問いかける。(『神奈川新聞』2016.12.8 朝刊)

Aさんは、「障害者の思いを知ってもらえるよう全国の人たちと語り合っていきたい」との思いから、知的障害者の声をどのようにして社会に届けるかを検討した。その結果、テレビや新聞等の報道機関の取材を積極的に受ける方向で活動を進めていくことになったのである。

## 5. 当事者団体「にじいろでGO!」の立ち上げ

2016年11月13日に参加したメンバーが中心となり、約2ヶ月に1回のペースでワークショップを開催することになった。2017年1月のワークショップでは、団体の名称についての検討が行われ、知的障害者による意見が中心となり「にじいろでGO!」という名称に決定した。「にじいろ」は、7色の異なる色彩が障害のある人もない人も共に生きていくことを意味していること、「GO!」は話し合いのときに「ポケモンGO!」が流行していたこと、前を向いて歩いていくという意味が込められている。

2017年4月には、東京、千葉、神奈川で当事者団体のリーダーとして活躍している知的障害者をゲストとして迎え、合同でワークショップを開催した。このワークショップでは、安心して生活できる場を考える大切さについて一人ひとりが意見を出すなど、近隣の団体へ活動を広めようとした。ワークショップの開催の他に、「にじいろでGO!」のワークショップの取り組みを全国に広めるために、Aさんを中心に全国(北海道、徳島、東京、兵庫など)で講演活動を行ってきた。講演を通じて、全国の当事者団体等にワークショップの取り組みが注目されるようになった。「にじいろでGO!」のワークショップの取り組みを知った北海道の知的障害者は、「ワークショップはわかりやすいやり方だと思った。コミュニケーションしづらい人にどう伝えていくかも考え、発信していく」(『朝日新聞』2017.7.25朝刊)と述べており、ワークショップの取り組みが全国に広まりつつある。

これまでのワークショップの内容は、写真や映像で記録し、講演活動の際に活用している。これは、言葉で伝えるだけでなく、実際に見てわかるようにとの思いが込められている。また、一部をDVDで配布するなど、知的障害者が見てわかりやすい取り組みとして現在でも継続している。

また、事件後1年を迎えるにあたり、「にじいろでGO!」は2017年7月8日に、これまで取り組んできたワークショップの紹介と様々な関係者をお招きし、事件に関するシンポジウムの開催を目的とした拡大ワークショップ「自分たちのことを自分たちのことばで話そう～津久井やまゆり事件から1年～」を開催した。シンポジウムの登壇者は、知的障害者を中心に、学識経験者、障害者の親、きょうだい、弁護士などであった。事件後1年を振り返り、当事者が声を上げていくことの重要性が確認されたのである。

## 6. 知的障害者が相模原障害者施設殺傷事件について語ることの意義

「にじいろでGO!」の活動は、2016年11月13日のワークショップ開催から1年以上が経過した。これまでの活動を振り返り、知的障害者が相模原障害者施設殺傷事件について語ることの意義についてまとめてみたい。

### ①知的障害者がこれまでの経験を語る機会の確保

ワークショップを通じて、知的障害者が事件について語るだけでなく、これまでの自分自身の経験を語る機会の確保に繋がると考える。言葉による語りが困難であっても、障害特性への配慮について、当事者とともに考え、工夫を凝らすことで本音を引き出すことが可能であると考えられる。

当事者とともに創り上げるワークショップは、多くの可能性を秘めていると言えるだろう。

### ②メディアを通じて知的障害者の声を社会に届ける

事件に対する知的障害者の声がほとんど報道されていなかったという点について再考する。2016年11月13日のワークショップ開催以降、テレビ、新聞に「にじいろでGO!」のメンバーの様々な想いが報道されるようになったことは、広く社会に知的障害者の声を届けることができた。これは、1年間の当事者による活動を通じて、特に大きな意義に結びつくものであると考えている。

また、他の地域でも知的障害者が事件について声をあげる活動が行われている。東大阪市にある社会福祉法人創思宛が立ち上げた「パンジーメディア」では、知的障害者が自らの声を伝えるインターネット放送局を立ち上げた。「いきてたらあかんのか」という、知的障害者の声は、優生思想があると言われる現代社会に、命の尊厳や大切さについての大きな問いを投げかけている。

### ③ICT機器等の活用

知的障害者が語るための具体的な配慮として、わかりやすいワークショップの開催やDVDなどの映像、インターネット放送など様々な取り組みが行われるようになった。また、iPadなどのICT機器の活用により、言葉を発することが困難であっても、自らのことについて語り、事件について意見を出せる環境が整いつつある。今後も知的障害者の語りが社会へと発信されていく環境を整えていかなければならない。

## V. 今後の課題と展望

「にじいろでGO!」は、活動継続のために、様々な問題を抱えていることも事実である。下記に活動を継続させていくための課題と展望について述べたい。

### ①活動資金の確保

ワークショップの開催により発生する費用としては、会場費、交通費、謝金などがある。これまで活動資金は、神奈川県手をつなぐ育成会やP&A研究会カナガワ(PAK)などの関係団体の協力により何とか凌いできた状況である。また、交通費については全額個人負担となっている。今後も活動を継続していくためには、助成金を受けるなどの対応が必要であり、来年度の活動資金の獲得に向け、助成金の申請を行っているところである。

### ②知的障害当事者リーダーの育成

現在、「にじいろでGO!」の会長を務めるAさんは、これまで神奈川県内の他の当事者団体のリー

ダーとして活躍しており、ワークショップの進行や講演活動などを問題なくこなすことができている。Aさんを中心に進められているワークショップの取り組みや講演活動を、今後は他のメンバーが同様の役割を果たすことができるようにしていきたいと考えている。そして、ワークショップを通じて、当事者団体のリーダーとなる資質のある知的障害者の育成を行うことを目標としたい。

### ③長期的な展望

相模原障害者施設殺傷事件に関しての報道がほとんど見られなくなってきた今日、事件のことだけではなく、知的障害者の声を社会に継続的に発信していく仕組み作りが求められている。現時点での長期的な展望としては、神奈川県内に知的障害者の参画による「権利擁護センター」の開設を3年後の目標に掲げている。これは、知的障害当事者による権利擁護活動(セルフアドボカシー)を展開することを目的とした団体となる予定である。

セルフアドボカシーとは、川村(2002)によれば、「生活上の障害や困難のある当事者が、自分の利益や欲求、意思、権利を自ら主張し、自分自身、または他者のために権利擁護活動を行うこと」であるとされる。自らの権利を主張すると同時に、他者の権利も護る活動を展開していくことを目標に掲げ、ワークショップの開催に加えて、知的障害当事者スタッフによる相談支援やピアカウンセリング、講師派遣などの事業を計画している。「権利擁護センター」の立ち上げに向け、「にじいろでGO!」による当事者活動は、今後も継続していく予定である。

相模原障害者施設殺傷事件が起きた2016年7月上旬に、「全国手をつなぐ育成会連合会」主催の全国大会が横浜で開催され、大成功を収めたばかりであった。全国から知的障害者が集まり、様々なテーマでの意見交換や手作りワークショップ、バスツアーなど魅力的なプログラムが盛りだくさんであった。筆者は支援者として、本人分科会を担当したが、知的障害者の持つ力や可能性の開花を感じさせる素晴らしい大会であったと感じている。事件のあった神奈川県だからこそ、知的障害者による権利擁護活動を今後も発展させていかなければならない。

## 引用・参考文献

- ・朝日新聞「聴いて 私たち障害者の声」2016年10月6日付朝刊
- ・知的障がいのある本人達の経験ワークショップ「知的障がいのある自分たちの経験を話し合おう—相模原障害者施設の事件のこと—」2016年11月13日配布資料
- ・朝日新聞「障害ある私たち 声発信」2016年11月14日付夕刊
- ・毎日新聞「相模原事件 障害者が本音語る」2016年11月16日付朝刊
- ・神奈川新聞「時代の正体 障害者殺傷事件考 実名で語る障害者 上」2016年12月8日付朝刊
- ・神奈川新聞「時代の正体 障害者殺傷事件考 実名で語る障害者 下」2016年12月9日付朝刊
- ・神奈川新聞「事件受けワークショップ 「安心」への思い語る」2017年4月23日付朝刊
- ・「にじいろでGO!」主催シンポジウム「自分たちのことを自分たちのことばで話そう～津久井やまゆり事件から1年～」2017年7月8日配布資料
- ・朝日新聞「いきてたらあかんのか やまゆり事件後、障害者自ら放送」2017年7月18日付夕刊
- ・朝日新聞「報告 やまゆり園事件から1年 下」2017年7月25日付朝刊
- ・高山直樹・川村隆彦・大石剛一郎編著(2002)『権利擁護』中央法規
- ・みんなで知る見るプログラム開発委員会(2013)『知的障害のある本人による「障害を知る・可能性を見るプロジェクト」』社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会
- ・志村健一・望月隆之・荒木敬一(2017)「知的障がいのある人の意思決定支援におけるiPad活用」『福祉社会開発研究』9,東洋大学福祉社会開発研究センター
- ・奈良崎真弓・望月隆之(2017)「知的障がいのある本人が相模原事件について本音で語る「にじいろでGO!」のワークショップの取り組み」『すべての人の社会』VOL.37-4,7月号